The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜新著紹介＞　語文　第17輯
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1956, 17, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新著紹介

小泉苳三博士著　**近代短歌史明治篇**（昭和三十年六月白楊社刊）

ちと旧聞に属するが、広く宣伝せられてゐない良書であるから、ここに紹介しておく。小泉氏は前に「明治大正短歌史料大成」三巻を出版してゐるが、それは実に精細な資料集成であつた。そのほう大な資料にもとづいて、この短歌史が書かれたのである。あまりに資料が多過ぎて、むしろその塩梅に悩みはあるが、記述はおほむね正確である。史論としての鋭さは期待出来ないかも知れないが、事実を年代を追うて概説してゐるから、これから明治の短歌を研究しようとするものにとつては、まことに便利な必読の入門書である。今まで出た明治短歌史のうちでは、最も詳細で、最も公正な書といふべく、A5版八百頁に及ぶ大著である。明治の短歌については、これまでに筆者も幾つかの文章を書いてゐる。その縁故により、この書について詳細な批評を試みるべき責務を感ずるのであり、著者に対してもその書評を約束したのであつたが、多忙のため未だその責めを果し得ずにゐる。ともかく今は、この書は推薦に値する書であることだけを述べておく。続いて大正昭和篇の完成をこひねがつて止まない。（定価千二百円）

大正大学助教授佐藤亮雄氏著　**みだれ髪攷**（昭和三十一年四月修道社刊）佐藤氏のみだれ髪研究は学界待望の書であつた。それが今出版せられたのである。慶祝に堪へない。この書は「みだれ髪校本」「みだれ髪拾遺」「みだれ髪の成立」の三部から成立してゐる。

「みだれ髪」は与謝野晶子の処女歌集であるが、文学史の上から言つても価値高き書である。「みだれ髪校本」は、明治三十四年の初版本を底本とし、その発表年月、初出雑誌、三版本、四版本、書簡等との校異を脚註としたものである。「みだれ髪拾遺」は、みだれ髪出版の明治三十四年八月までの晶子の短歌作品のうち、みだれ髪に入れられなかつた三百三十五首の歌を年代順に配列した。「みだれ髪の成立」は、みだれ髪が生れるまでの過程を晶子の伝記の中に辿つてみたもので、その最後にみだれ髪の諸本についての解説を添へた。著者は、この成立篇は解題に代へた小文であると述べてゐるが、晶子らの書簡をはじめ新しい資料を豊富に使用して、ここに正確な若き日の晶子伝を書きあげてゐる。晶子と鉄幹との関係については先年来かずかずの話題をまき、論争が行はれ、この筆者なども引き合ひに出されたりしたが、この書はそれらについても一往の終止符を打つものとなつた。また、みだれ髪の歌には、最初の発表以来、しばしば書き改められてゐるものが多いのであるが、この書は丹念にそれを記録してゐてくれるので便利である。また拾遺篇とあはせて、晶子の初期短歌の全貌がここに見られるのがありがたい。ただ望蜀するところは、晶子のみだれ髪の歌の改変はみだれ髪以後の全集類に於ても行はれてゐるから、それをも併せ知り得るやうにして貰へたら一層便利であつたらう。晶子、鉄幹の手紙をはじめ色々な珍しい新資料がこの著者の努力によつて大正大学に収められた。それらを利用してのこの書の成果は、今まで出たみだれ髪校本の類に比して遥かに完璧のものである。珍しい写真の多数載せられてゐることも嬉しい限りである。聞くところによれば、最近はまた宅雁月の所蔵品も同大学に購入せられたとかいふことであるが、佐藤氏

の今後の研究には大いなる期待をかけてゐる。（定価六百五十円）

国崎望久太郎氏著　**正岡子規**　これは創元社の日本文学新書の一である。（昭和三十一年四月刊）新書版ではあるが、なかなか小気味のよい本である。巻頭の「子規復興」といふ文章の中で、「子規は日本の民族の上昇期に国粋を発揮する（文学漫言）目的をもつて伝統文学と対決して、新しい生命をよみがえらすことができた。いまもわれわれのおかれている植民地的状態のなかで、どのようにして国粋を発揮することが可能であろうか。われわれは子規から多くのことを学ばねばならない。」と述べてゐる。即ち、子規を現代的意義に於て捉へむとする目的を以て書かれたのが本書であつて、先づ子規の生涯を簡単に叙し、その文学主として俳句の世界と短歌の世界とを作品の解説をしながら解明し、最後に子規の歴史的位置について論じた。かやうにいふと、甚だ平凡な内容のやうであるが、その文章の筆触が非常に新鮮なのである。そして、この書は一種の子規素描であるが、その素描がやはり新鮮なのである。一読に値する書である。国崎氏は立命館大学人文科学研究所紀要第四号に「子規論をめぐる二三の問題」といふ論文を書いてゐる。子規が今までどのやうに評価されて来たかを回顧し、さらに子規の漢詩を論じ、漢詩人としての子規の存在が俳人子規の形成に及ぼした影響といふ問題を考へようとしてゐる。また、子規の初期の文学論を考察して、子規の現実主義の具体的内容を確認する手がかりとしようとしてゐる。日本文学新書の正岡子規を読むものは、この論文をも併せ読んで国崎氏の子規研究の全容を想察すべきであらう。（定価百五十円）

このほか、わたくしの机上には、昭和女子大学光葉会の著述出版する**近代文学研究叢書**の第一巻第二巻がある。これは明治以後の文学者のバイオグラフイーである。全部で六十巻ぐらゐ続くらしい。われわれは、かういふ書物の出現を待ち望んでゐたのであるから、これは是非最後まで完成させてあげたい。

以上は明治文学に関するものであるが、その他では、

富倉徳次郎氏著　**類纂評釈徒然草**（昭和三十一年五月開文社刊）がある。富倉氏は兼好法師伝の研究では既に一家をなしてゐる。この書はその余業である。この書の特色は、徒然草の全章段を主としてその内容の上から分類整理し、たとへば、一つれづれとは何か、二無常の認識、三趣味論者としての言説、四求道者としての言説等八項目に整理分類して本文を載せ、それに語釈と口訳とを加へた点にある。鑑賞批評や解説もついてゐるから、徒然草の文芸書としての全体的かつ具体的な評論をこの書を通して期待することが出来るなほ、この書には附録として、兼好自撰歌集に注釈を加へたものと兼好年譜とが加へられてゐる。これは学者の大いに参考とするに足るものである。（定価四百八十円）

岡村健三氏著　**芭蕉と寿貞尼**（昭和三十一年三月芭蕉俳句会刊）この書は異色ある内容である。通説では芭蕉には寿貞尼といふ妾があつたといはれてゐるが、寿貞尼は芭蕉の妾ではないといふことを言はうとするのがこの書だからである。筆者は専門でないからこの書に批評を加へるだけの知識をもちあはさぬが、しかし一往はこの書のやうな考へ方もしてみる必要があるのではないかと思ふ。もつとも「いづれにしても真の人間芭蕉はその行実や作品によつて窺ふべきであり、妾の存否などは問題にすべきでないであらう。」といふ著者の言には些か言ひ過ぎがあるかも知れぬが、しかし、ほぼわが意を得たるにちかい。

（小島吉雄）